百川メール　2004.07.01＆02

百川様

昨日書が届きました。ありがとうございます。

武士道について新たな興味が湧きました。何故今武士道なのか、世間の関心の由来が分かりませんが、武士の生きた時代を思い、我々の精神のルーツの一つを探るのも一興ですから、丸山真男の論文を読んで、新渡戸稲造や常朝や三島由紀夫も読み直してみます。

武士は、武を持って糊口を凌ぐ者であり、武に意義を見出すためには命をも提供せざるをえないことは当たり前のことで、馬子が馬を引くように、そこには崇高な精神だとかモラルだとか道があるわけでもないようにも思います。武がどのような形で必要とされるか、時代と共に変わった筈ですが、共同社会が存続するための役割の一つとして身分が固定化し、平和時においても存在価値を見い出す必要があったからこそ、武士道なるものを考え出し、精神的に身分を担保しようとしたのではないでしょうか。

大半の武士は、自分なりの人生を、自分なりに満足の行く形で全うしたに過ぎないのではないでしょうか。平凡にしろ、腹を切るにしろ、或いは討ち死にするにしろ。

最近、社会に重要な役割を負った人のモラルハザードが問題視されていますので、責任だとか奉公だとかを考える便として、武士道を考えることも意味あることかも知れません。

先ずは、御礼まで。

公文秀明　2004.07.01.

ｘｘ

公文さま、

メイル拝受しました。おっしゃるように、武士道は、太平の世となり無用となった者たちが、それでもなお自分たちが人々のうえに立ち、存在する理由を求めて作り出したものだというのが根本だと思います。しかしまた、そうした利己的な意図から出発点しながら、葉隠のように、たんなる自己正当化をこえて、はからずも時代の核心にふれた興味深い思索を展開したものもある、ということなのだと思います。

モラルは宗教的なものが支えとならないかぎり、結局は自分（や自分を含む集団）の利益の正当化を意識的にせよ無意識にせよ狙っていることが見え透いてしまうものに堕すると思われます。とはいっても、宗教的であれば「鰯の頭も信心から」式に何でもかまわない、というわけでもなく、そのあたりが難しいのだと思います。社会を維持するうえで都合がよいフィクションだからといっても､人間を愚かなままにしておくような「信心」を保全しつづければ、たとえ人間の大多数は愚かだとしても、あるいは、人間は素直な愚かさのほうが尊いのだと考えるにしても、それでも、それは人間が人間を見くびったことになり、そのツケはいつか回ってくるのではないかと、僕は考えてしまいます。

お送りしたエッセイは短い簡単なもので、そうした大問題にふれるだけの深さはありません。それに、そうした問題を追求するだけの力が、今の僕にはありません。追求したいという気持ちだけはあるのですが、ともすれば、もう駄目だという気持ちになりがちです。しかし、それでも、まだ、なんとか頑張ろうと思って、いろいろもがいているところです。

呼吸法や、気功など、いろいろ、実践したり、書物を読んだりしていますが、それも、健康のためだけではなく、いまふれたような問題とかかわるところがあると考えてのことですが、はたして期待どおり何か思索のてがかりが見つかるか、今のところは、分かりません。

それでは、とりあえずこのへんで。

百川敬仁　7月2日